

域を中心にとりあげ、地区別評価を行い各地区の問題点と市民意識との関係を把握した。その結果、市内は阪急神戸線以北と、以南（旧市街地）に大きくわけられた。前者は純住宅地域で、土地利用、公害問題においては、現在のところ問題ないとみられるが、後者は住宅、商業、工業の混合地域で、これらの問題が切実である。住宅、都市施設は、北南をとわず、市の問題となっている。

水産加工業の変貌過程についての地理学的考察

——銚子市をフィールドとして——

吉原和子

銚子市には開干し、煮干等の一般加工から節類、缶詰、煉製品、魚粉等と、水産加工業が全面的に立地し、特に開干しさんまのメーカーとして全国的に知られている。何故、この水産加工業が特化しているという経済地域性が発生したのか。まず現状を明らかにし、一定程度の視座を確立した上で、発生から現状に至る変貌過程、それを規定する地域内部の矛盾をさぐりたいと思う。

第二篇 水産加工業の現状

①、開干さんま、開干さば、桜干、煮干、丸干のいわし等々、さんま、いわし、さばの加工が中心である。特に低次加工品のうちでも手間のかかる開干がさかんである。原料の地元依存度は、他の県内産地と比べると小さい。昭和40年頃から、生産数量の停滞に対して、生産全額の伸びが顕著となってきている。これは品目の高級化と、物価騰貴とによるものと思われる。

②、6、7、8月が低調期ではあるが、周年操業を行なっている。専業率は、千葉県平均の2倍弱であり、又、経営規模は相対的に大きい。1企業当りの平均従業員数は、約9人である。原料入手がまだまだ不安定であるため稼働率の変動大となり、従って、臨時労働者の比率が大である。

③、雇用労働力中、婦人労働は80%を占め、漁夫及び農家の主婦が大半である。1人当り現金給与額は、醤油醸造業の20%であり、賃金コストが低く、低賃金であることがわかる。

④、戦前からの操業は全企業中約9割でありそのうち、明治年間操業は半数を占める。資本はもとも少額で済み、機械化は大同小異であったものが、現在は、冷蔵庫の導入を軸として、企業の両極分解が進展している。

⑤、場所的分化を見ると、開干さんま製造業者は、一般に零細であるが利根川河岸の漁業発生地の1つであり、先進地帯である家屋密集地に集中している。又、いわし加工を主とする比較的大規模な工場は、先進地帯の周辺部に戦後進出してきている。又、ここは、宅地化と競合関係にあり、汚水、悪臭が公害問題となっている。

第三篇 水産加工業の変貌過程

① 干鰯、鰯粕の魚肥生産を目的として、鰯漁業が江戸時代初期に成立、それと同時に、目的貫徹し、干鰯、鰯粕生産を行なう。当初鰯漁業者、即ち、紀州漁民が従事したが、後に地元の半農半漁家や、江戸、関西干鰯商人が進出。水揚げされた鰯のほとんど全部を干鰯、鰯粕に生産。この傾向は、明治末年まで続く。

② 魚肥利用が減少し、かわって発達した水産油脂工業のために魚油の生産がふえた。鰯粕、魚油が主要製品であった大正から戦前まで、①の段階とは海況、漁業、特に職業構成等、急激な変質はない。

③ 食料品生産への転換。開干さんまの生産地となる。戦争、鰯の漁獲激減という②の段階を支えるには、困難な条件が出現し、岐路にたたされたのであるが、この変貌を強行させたのは、食料難克服のための食料品製造という統制経済下の国家的強制であった。

この広く国内経済からの要請という一般的条件を特殊化する要因は何か、が中心テーマであった。だから、内容的には、既述の現状と重複することが多いが、再度、戦後の変貌過程を詳細に考察する必要がある。しかし、それを文章化しえず、論証としては、極めて不十分なままに終わってしまった。その不十分性を意識しつつ、結論的に言うならば、現状でのべた、②、③、④の特徴が、又、特殊化する要因であろうと思う。

● 企画編集・タイプ・オフセット印刷
新聞・雑誌・パンフづくりに

あなた自身で
とらえる小宇宙
ミニコミの世界

工芸社
9 板橋区南町9番地
5
9
・
5
0
6
4